

お 名 前	性 別	終戦時の年齢	現 住 所
あ べ よしあき 阿部 義明	男 性	2 0 歳	豊橋市石巻萩平町

阿部氏が介護施設に入居されて取材困難のため、娘の敬子さん、孫の小林美希さんの協力を得て、所蔵の記録をもとに原稿を作成しました。お二人の話です。

「私の祖父は、新城農蚕学校を卒業後、昭和17年4月に愛知青年師範学校へ入学しました。そして、昭和19年10月に石巻国民学校教諭となりましたが、予備士官学校に合格したため現職のまま豊橋第一陸軍予備士官学校へ入校しました。いずれ軍隊に入るなら、赤紙で徴兵されるより士官学校へとの思いが強かったようです。合格するのはとても難しかったと聞いています。終戦時は陸軍少尉だったようです。

戦後は復職し、定年まで主に新城市の小中学校に勤務しました。書くことが好きで、戦時中のことや郷土史に関する多くのことを書き残しています。(2025.4.6)

「恐るべき教育の力」

「50年のむこうにあの日があった」より

1994年「士魂会」編集（抜粋&平易に修正）

私が小学校へ入学したのは、昭和6年(1931)である。最初に「修身」(現在の道徳)で教えられたのが、「キグチコヘイハ シンデモ ロカラ ラッパヲ ハナシマセンデシタ」という日露戦争の美談(?)であった。奇しくもその年の9月に満州事変が起き、次第に強化されていく軍国主義教育をまともに受けながら成長したのが、よきにつけ、悪しきにつけ「戦中派」といわれた私たちの世代である。

昭和16年(1941)12月8日の太平洋戦争開戦の日は、明日から学期末テストが始まるという日だったが、興奮のあまり、テスト勉強などそっちのけで、ラジオにかじりついていたことが印象に残っている。

開戦当初、わが皇軍が各地で連戦連勝し、国民が有頂天になっていた昭和17年(1942)の夏頃、こそこそと声をひそめて、「ミッドウェーで海軍が大敗北したそうだ。」といううわさを耳にして、まさかとは思いつつ、背筋が寒くなるような思いをしたことを鮮明に覚えている。

18年(1943)2月、大本営はガダルカナル島での敗北、撤退(転進といった)を初めて公表した。その後、大本営発表の「玉砕」が相次いだけれども、この玉砕報道で日本の敗戦につながるような危機感をもったことはなかった。

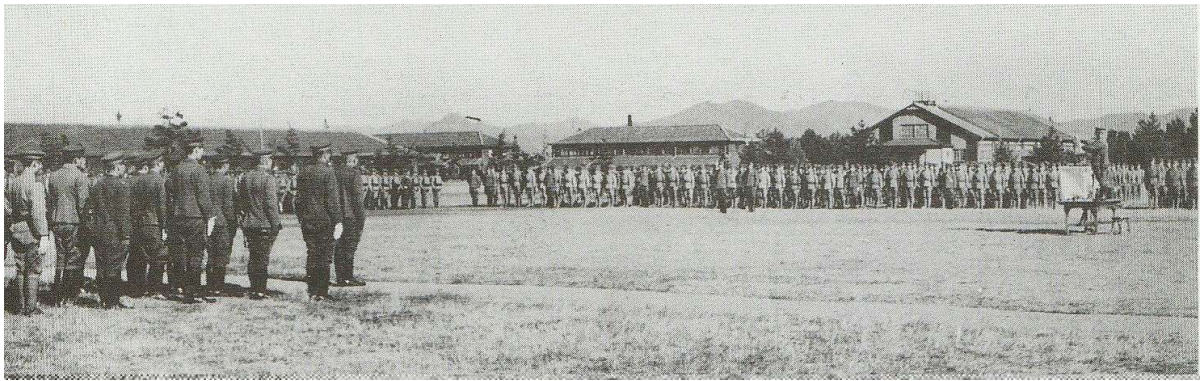
19年(1944)7月にサイパン島玉砕のニュースを聞いたときは、既に徴兵年齢が1年繰り上げられ(昭18.12)、私も徴兵検査を終えていたので、いよいよ来るものが来たという気持ちで爪を切り、桐の小箱に入れて「遺品」と表書きした。しかし、日本が負けるかもしれないという深刻な意識は全く持たなかった。

19年10月、特別甲種幹部候補生として入校し、教育を受けている期間中は、ひたすら「必勝」を信じ、「殉皇」(天皇のために命を捧げるの意)一途の修練に明け暮れていた。20年6月に卒業後、見習士官として神奈川県に赴任し、平塚市の空襲を目のあたりにし、米軍の艦砲射撃の砲声や不気味な地鳴りを聞いたときでも、日本が負けるなどとは少しも思わなかった。

20年8月14日、週番士官(週番は1週間割り当てられる当番)として軍需工場へ徴用された民間人に、「明日の正午、天皇陛下がラジオ放送される。」旨を伝達したところ、一人が両手を挙げて「これでしょう!」と言う。一瞬、どやしつけてやりたい衝動にかられたが、かろうじて冷静さを保つことができた。そして、「民間人の中にはとんでもない奴がいるものだ。」と、不愉快な気分になったが、「もしかしたら……」などという疑念のひとかけらも持たなかったのはなぜか。

今にして思えば、当時、日本の空は制空権が失われてしまっていたこと。空襲による全国各地の被災の惨状、食糧難。本土決戦に備える軍隊装備のお粗末さ等々、どうみてもわが国の決定的敗北につながることは、はっきり予感できたはずなのに、最後まで「勝てるとは思わなかったが、負けるとも思わなかった」心情が不思議でならない。

田舎に育った私は、子どもの頃に狐に化かされたという人の話をよく聞かされたが、まったく「狐に化かされた」としか説明できない、戦中派世代の見本のよな私である。



入校式 昭19.10.12 「特別甲種幹部候補生の記」より

「予備士官学校の厳しさ」

手記 「殉皇 豊橋第一陸軍予備士官学校の生活記録」より抜粋

平成9年9月(1977)発行

昭和19年10月12日 入校式

厳格な身体検査も無事に通過して、本日入校式。いよいよ入校を許されて、軍服・伍長の階級章、幹部候補生の象徴たる星の座金が自分のものとなった。

きゅうくつな軍服、5枚の毛布と寝台、蒸気飯特有のくさい食事、これらが今後の生活である。ジハン(シャツ)、コシタ(袴下)、衣袴(上着とズボン)、ジョ

一カ(上靴), キャハン(脚絆), 俺, 貴様等々, 今後使用すべき軍隊用語をまるで小学校1年生のように教えられる。教官のいる所では「貴様は……」と言うけれども, 全然ピンとこない。陰では「君は……」といわゆるシャバの言葉を出してしまう。やはり, シャバ言葉の方が血が通っているようだ。

なお, 本校における教育期間中は, 禁酒, 禁煙を宣せられた。

区隊長によると, 違反して謹慎中の場合は, ひたすら軍人勅諭(天皇が軍人に示した心得)の謹書(謹んで書くこと)に明け暮れる。食事はわずかな主食と, 副食の食塩のみという。

11月〇〇日 戦闘教練(訓練)

笠松高地(高師原)に敵を想定しての分隊戦闘教練が行われた。傘形隊形(逆V字に分隊を配置し先頭に分隊長が立つ隊形), 散開隊形(10 mの間隔で配置)を終え, 横一線に開いて一斉射撃を開始した時である。突如“状況中止”の命令がくだり, 区隊長のどなり声が爆発。

「玉井候補生ッ, 貴様どこをねらっとるかアーツ！」

「ハイ, あの銃眼(内部から銃で射撃するための小さな窓)をねらっておりました。」

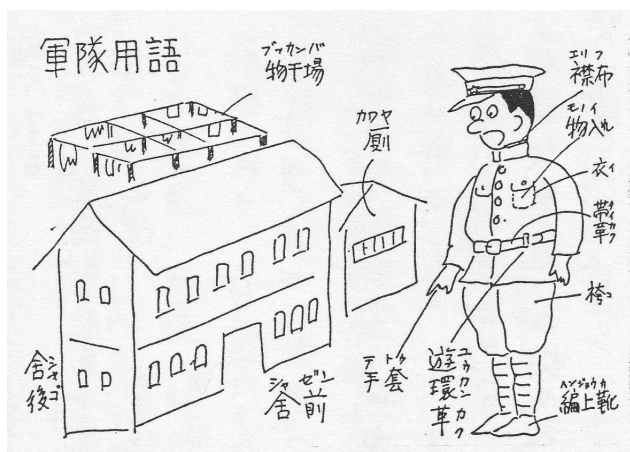
「ウソをつけーッ!, 立てーッ!, 帰校, 帰れーッ！」

軽機関銃射手, 明治大学卒の玉井候補生。区隊で2番目に背が高く, 堂々たる体格の玉井が,

「許してください。これから気をつけます！」

と再三再四懇願するのだが, いっこうに許してくれない。とうとう玉井はその大きな体をふるわせて泣き出してしまった。

「帰れといったら帰れッ！」



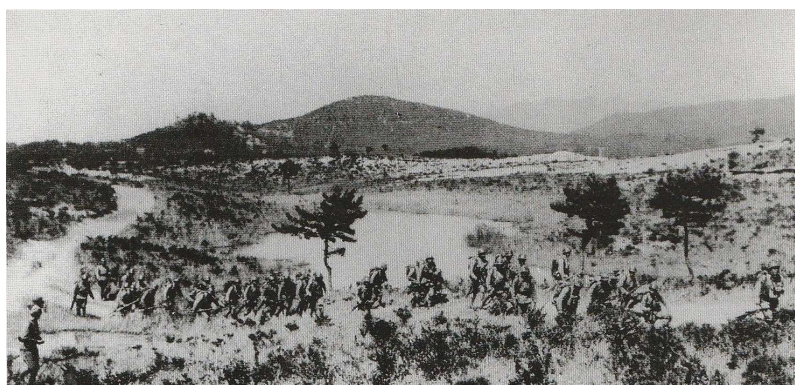
阿部氏が描かれた軍隊用語 「殉皇」より

第3中隊第2区隊54名の出身県

愛知	8	福井	4	奈良	2
大阪	7	東京	3	広島	2
滋賀	5	静岡	3	香川	2
京都	5	兵庫	3	他県	10

出身大学 36校

慶応大・明治大・中央大・法政大
 関東学院・武蔵音大・専修大・京大
 同志社大・大谷大・大阪商大・体育大
 早大専・立命専・明大専・早稲田専



実弾戦闘訓練 「特別甲種幹部候補生の記」より

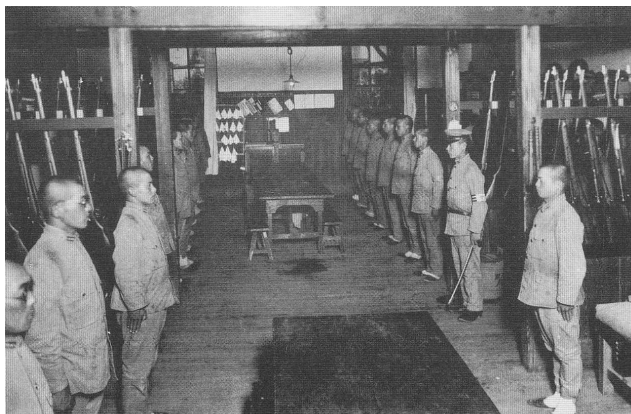
と区隊長。気の毒にも玉井は、一人うちしおれて帰って行った。

二つでも三つでも、いや気がすむまでぶんなぐって、あとはあっさり許してほしい。玉井がやられたような精神的な痛めつけは全く堪えられない。帰校後、みんな玉井をなぐさめたり^{げき}激励したりしつつも“明日はわが身”としみじみ思ったことである。当の玉井は、いつもの^{しょくよく}食欲をすっかりなくし、「俺はもうだめだ。」と、すっかりしょげこんでいた。

11月〇〇日 非常呼集^{こしゅう}

死んだように眠^{ねむ}っていたとき、突然^{とつぜん}の非常呼集。無意識に飛び起きて、真っ暗やみの中を手さぐりで衣服を整え外に飛び出す。声を立てることは一切^{げんきん}厳禁。ざわざわとした物音とけたたましい足音がするだけ。

区隊ごとに集合とか、到着^{とうちやく}順に営庭（兵営の中の広場）とか、その時々によ



舎内点呼 「特別甲種幹部候補生の記」より

って違うが、とにかく迅速が要求され、早い者と遅い者がチェックされていく。

人員点呼、軍装（装備^{ぐんそう}や軍服^{そうび}）検査の後、講評を聞いて再び就寝^{しゅうしん}するのだが、午前2時、3時の呼集だと床についても熟睡^{じゅくすい}できない。戦争に昼夜の別がないことは分かるが、よくも体が続くものだと、われながら感心させられる。

12月〇〇日 朝食ぬきの訓練

およそ毎日の日課は、起床^{きしやう}、点呼^{てんこ}、舎内外と自習室^{せいしやう}の清掃、兵器の手入れ、食事あげ（当番のみ）。その間に洗顔^{せんがん}、遙拝^{ようはい}（約500m離れた大講堂近くにある遙拝台^{はな}に行き、伊勢神宮、宮城^{いせ}（皇居）、故郷^{きやうじやう}の父母を遙拝した後、軍人勅諭^{こうきよ}を奉唱して帰る）それから朝食となる。ところが伊藤区隊長が週番になると、必ず一度は朝飯を食べさせない。あそこが汚い、ここにホコリがついていると、何度も何度も掃除^{そうじ}のやり直しである。もう大丈夫^{だいじやうぶ}だと思うと、「まだ天井^{てんじやう}がふいてない。」と言う。やむなく天井まで雑巾がけを始める。ようやく許しが出ても、飯を食べる時間はなくなっているのである。こんな日に限って、演習^{えんしゆ}はいつにも増して厳しくなる。こういう教育訓練の繰り返しによって、一切の批判を超越して服従する心も、軍人精神も死生観も養成されていくのであろうか。

12月〇〇日 休みなし

「正月には休暇^{きゆうか}が出るそうだ。」との情報を流す者がいる。真偽^{しんぎ}のほどは分からずとも、俄然みんな元気ようになった。「よーし、腹いっぱい餅^{もち}を食うぞ。」「早く畳^{たたみ}の上であぐらをかきたいなあ。」とはしゃぎたてる者もいる。しかし、……

1月元旦 遙拝（遠くから拝むこと）

正月には家に帰れるどころか、元旦の朝は非常呼集2度に及ぶ。第1回は午前零時。週番士官が「起床！ 昭和20年の夜は明けた。ただ今から洗顔（せんがん）を済ませて、遙拝（ようはい）をしてくるように！」と命じた。真っ暗な闇（やみ）の中を手探（てさぐ）りで氷（こ）を割（わ）って洗顔、凍（こ）てついた校庭（がいどう）を遙拝台（ようはいだい）へ向かう。遙拝台ではすでに多くの人影（ひとかげ）が動き、それぞれに小声（こゝろ）でみことのりをつつしんで唱（な）えている。帰（か）って、冷（ひや）え切（き）った体を再び毛布（もうふ）の中へうずめる。

第2回目は午前4時。校庭（がいどう）に整列（せいれつ）が終わると、暗闇（くらやみ）の中を中隊（ちゆうたい）全員（けいべい）が行進（こうしん）して飛行台（ひこうだい）（高師原）へ、初日（はつじつ）を拝（はい）む。

1月11日～18日 中部第38部隊（三重県久居）へ隊付勤務

1週間の予定で隊付勤務（部隊に加わること）を命じられ、わが第3中隊は三重県の久居連隊（ひさゐ）で勤務することになった。久居駅（ひさゐ）に下車（げさ）し、連隊（れんたい）を間近（まぢか）に見たとき異様な光景（ひさゐ）が目に入った。それは、連帯（れんたい）の周囲（しゅうい）をとりまく干し大根（かんべ）の壁（かべ）であった。

連隊到着（れんたいとうちやく）と共に各中隊（かくちゆうたい）に分散配属（ぶんさんはいじゆく）となる。真っ白（はく）い雪（ゆき）をいただいた鈴鹿山脈（すずかさんみづ）から吹き下ろす風（ふう）は、豊橋（とよはし）よりもさらに冷（ひや）たく、肌（はだ）に突き刺（さ）さってくるように感じる。当連隊（とうれんたい）の主力（しゆりき）は伊勢志摩方面（いせしま）へ陣地構築（じんちこうきく）に出動（しゅつどう）しているというが、舎内（しゃない）にはわか造（わかぞう）りと思われる半2階（はんに）が造（ぞう）られて、兵舎内（へいしゃない）は超満員（ちようまんいん）である。こんなところにもひっ迫（ひつぱく）しつつある本土決戦（ほんつけっせん）への非常態勢（ひやうたいせい）がひしひしと感じられる。

「〇〇二等兵（かゐや），厠（かわや）へ行（い）って参（まゐ）ります。班内（はんない）お世話（せわ）になります。」

「〇〇二等兵（かゐや），入浴（によう）に行（い）って参（まゐ）りました。班内（はんない）お世話（せわ）になりました。」

初年兵（しゅねんへい）たちが内務班（ないむはん）の出入（しゅつにゅう）のたびに大声（おほこゑ）でわめ（わめ）ているのも意外（いがい）だったし、初年兵（しゅねんへい）の目（め）は常（じょう）におどおどして、何物（なにもの）かに恐れ（おそ）れおの（おの）のいて（い）る様子（ようす）がよく（よ）うかが（か）われる。入浴（によう）に行（い）ったはず（はず）の初年兵（しゅねんへい）は、もの（もの）の5分（ごふん）も経（た）たないうち（うち）に帰（か）ってくる。それ（それ）を見（み）ると、ただ顔（かほ）を洗（あら）われ、手ぬぐい（てぬぐい）がぬれ（ぬ）れているだけ（だけ）である。

班内（はんない）で最（も）もうるさい古兵（こへい）や上等兵（じやうとうへい）と同居（どうきゆう）している初年兵（しゅねんへい）の苦（くる）しみ（しみ）を思（おも）うとき、自分（自分）たちの幸福（しあふ）をしみじみ（しみじみ）と思（おも）わず（わず）にはい（い）られない。食事（じき）も、食器（もく）に盛（も）られたほとん（ほとん）どは干（かん）し大根（だいこん）を葉（は）ぐるみ（み）きざみ（ざ）込（こ）んだ（んだ）もので、米粒（こめつぶ）は数（かず）えら（え）れるくら（くら）いしか混（ま）ざ（ざ）って（って）いない。しかも（しかも）、そんな大根飯（だいこんい）を古兵（こへい）たち（たち）が見（み）守（も）る中（中）で盛（も）りつ（つ）ける者（もの）は、古兵（こへい）の食器（じき）には飯粒（いづ）の多（おほ）いところ（ところ）を山盛（やまも）り、自分（自分）たち（たち）初年兵（しゅねんへい）の食器（じき）には大根（だいこん）ばかり（ばかり）のところ（ところ）をちょ（ちょ）っぴり（ぴり）～食器（じき）に半（はん）分（ぶん）も（も）ない（ない）～。

初年兵（しゅねんへい）経験（けいけん）の全（ぜん）く（く）ない自分（自分）には驚（おどろ）か（か）されること（こと）ばかり（ばかり）。これが皇軍精銳（こうぐんせいゑい）の温床（おんしやう）であ（あ）った（った）のか（か）と思（おも）うと、たま（たま）らない気持（きもち）にな（な）って（て）きた。こんなこと（こと）を（を）して（して）いて（いて）、本（ほん）当（とう）に強（き）い兵隊（へいたい）がつく（つく）れる（れる）のであ（のであ）らう（らう）か。働（はたら）き盛（さか）りの初年兵（しゅねんへい）に満（まん）足（そく）に食（じき）事も（も）与（あた）えない（えない）で、と疑問（ぎもん）がわ（わ）くと共（とも）に、彼（かれ）ら（ら）へ（へ）の同（どう）情（じやう）は（は）つ（つ）の（の）る（る）ば（ば）かり（かり）であ（であ）った（った）。装（そう）備（び）の点（てん）でも（でも）至（いた）れり（れり）尽（つ）く（く）せ（せ）りの予備士官学校（よびしこうがく）と比（ひ）べ（べ）れば（れば）問（もん）題（だい）にな（な）らない。地方連隊（ちほうれんたい）と国軍（こくぐん）

の幹部を養成する士官学校と比較すること自体妥当ではないかもしれない。

いずれにしても、兵教育を全く受けず、いわゆる出陣学徒として直ちに幹部教育が受けられる自分たちの恩恵と幸福を心から感謝せずにはいられない。

1月〇〇日 シラミ

寝室にシラミがわきだした。久居連隊勤務のおみやげらしい。襦袢（下着）を脱いでみると縫い目の所に白く、尻の方だけ黒みがかかったシラミがじっとしている。そればかりではない。縫い目という縫い目には、白く小さい卵がビッシリと産みつけられている。このすばらしい繁殖力には、思わず背筋が寒くなる思いがする。爪でつぶすと「ピチピチピチ……」と、まるで小銃でも撃つような音がする。

不潔なところへシラミがわくらしいが、それも道理で、ここ1ヶ月近く入浴をしていない。この高師台地は冬の渇水期で断水することもしばしば、入浴どころか洗濯も十分できない。十数日ぶりの入浴と聞いて、みんなが大喜びをしていると、「各中隊の入浴時間は15分！」と指示される。



2百人あまりがわずか15分で入浴する光景はすさまじい。「おい、早く入れ」「もっと前へつめよ。」「手ぬぐいを頭に乘せて、両手の人差し指を水の上に出して！」と指示されながら、長さ約4m、幅約2mの浴槽を首から上と人差し指を湯から出して、すくんだままモゾモゾと前進。4m先でところてん式に突き出されて入浴終了。体を洗うこともできず、湯につかって少々温まるだけ。体をふいて軍服を着る頃には、もう身ぶるいするほどの寒さである。

タオルをぶら下げて、約20m離れた中隊舎の入口まで来てみると、持っていたタオルが凍り、棒のように固くなっていた。

3月〇〇日 空襲警報

敵機の来襲が日増しに激しくなり、毛布の中で昼の疲れを安心して休めることもむずかしくなってきた。

午前1時、空襲警報発令。毛布1枚をまとめて防空壕に退避。身にしみ通る寒風にふるえながら30余波（回）の敵機来襲を聞く。外気はもちろん氷点下だ。

今、本土のどこかの街が空襲され、焼夷弾や爆弾の中、火の海の中を同胞が逃げ惑っていることであろう。南海の孤島にあったわが将兵が、米軍の徹底した物量攻撃の前になすすべもなく、むなしく玉砕していった戦闘の詳細は、しばしば区隊長から聞いてはいたが、本土決戦はいよいよ深刻の度を加えているようだ。

5月10～12日 野外総合訓練

2泊3日の卒業演習、称して「泊行事」という。わが第3中隊の行程は、豊橋
→ 中宇利（大休止）→ 三ヶ日（1泊）→ 二川 → 豊橋と故郷の地を演習しながら通過することとなった。幸運でうれしい限りである。

再び踏めることもあるまいとあきらめていた故郷の大地をいま踏みしめ、なつかしい山河を目の当たりにして感無量。自然は入校の日そのままに、初夏の光に輝いている。西郷小学校を過ぎ、マルヨ商店前にさしかかると、隊伍の中に予の姿を発見し、頭を下げてくれたのが米子さん（小林与志美氏夫人）であった。予も戦友に気づかれないように、会釈と微笑みを返す。

大向（西組）地内で別所街道を右に折れ、新たな戦闘状況が開始される。突然区隊長から命令が出た。

“阿部候補生は単身、斥候（偵察する人）となり、四ッ谷付近の敵情を搜索し、午後5時、富岡十字路に至るべし”と。

区隊長の温情である。復唱する声も心なしか震える。戦友たちに「悪いなあ」と心中許しを乞いながら、一路家へと急ぐ。

母は西の畑にいた。県道を一人で歩いて行くと母の姿が見える。あぜ道を伝って母のところへ近づくと、腰を伸ばして予を見つけたが、とっさのことでぼう然と立ったままで声もない。間をおいてから「おお、義か。」と満面の笑みをたたえて迎えてくれた。

母の話によると、数日前に第2中隊が来て、お寺（萩平の竜泉寺）へ炊き出しの奉仕に出た。その時、数日後には香取隊（第3中隊）が来ると聞いたので、ひと目でも会えたらと、かすかな希望を持って県道近くの畑に居続けたのだという。

家に来てみると、浜松の姉が疎開してきていた。裏の義恵さんも会いに来てくれた。父は不在だった。思いもかけず家に帰ることができただけで、もう何も言うことはない。「昼飯はあるから。」と言ったが、飯ごうの底にこどんでいるコウリャン飯を見て、「これじゃあかわいそうだ。」と、母と姉がせわしく走り回ってごちそうを作ってくれる。しかし、副食の鮭の切り身を見て、「近ごろは魚など見たくてもない。」と言う。「こんなもの、軍隊ではネコマタギと言って、あきるほど食べている（実際はそれほどではない）と言うと、「じゃあ昌子と君子にやろう。」と大事そうに戸棚に納めた。母はいろいろ心配してくれたが、予は「食事のことも訓練のことも何一つ不満はない。貧乏の中で大きくなったせいかもしれないが、大学出の連中に負けるようなことはぜったいないから。」と告げた。

富岡十字路の少し前で演習中の区隊に合流した。中宇利で大休止。午前1時まで民家に分宿する。予は宇理小学校東南の近藤さん宅へ5名で世話になる。「兵隊さんが泊まったことなど何年ぶりのことか。」と歓待してくれた。座るのも寝るのも畳の上、まっ白な米のご飯、綿の入った布団、着物。どれもこれも懐かしいも

のばかりだ。酒も出してくれたが固く断わった。

布団の中で感慨にひたっているうちに、刻々と集合時刻が近づいてくる。眠る時間はとてもない。遅刻しては大変だから眠るわけにもいかない。午前1時少し前、中宇利公会堂に集合。みんな生まれ変わったように満ち足りた面持ちをしている。「もう一度だけ畳の上に、布団を敷いて寝てみたい。そうすりゃあ死んでもいい。」などと言い暮らしていたのだから当然であろう。

中隊全員が整列。区隊長が「三ヶ日方面の敵に対して払暁（明け方）攻撃を敢行する。中隊の進路は瓶割峠。途中、山岳の険しい道を通るが、絶対に声を出さな。防音の処置を厳重にして、断崖に足を滑らせる者は黙って落ちて死んでいけ。第1区隊より前進。」と命令される。見送りに来てくれた人々のすすり泣く中を、さわやかな感謝の気持ちで戦場へと急ぐ。

第2夜は、三ヶ日町奥山の山田猛さん宅に泊まる。ここでも非常な歓待を受け、朝は赤飯まで炊いて前途を祝ってくれる。必ずご期待に添います。と心に誓いなが

ら山田さん宅を出る。

二俣線、三ヶ日駅の南、三代橋を通過し、瀬戸の大橋で小休止。瀬戸を出ると、「高師原に敵の落下傘部隊降下、直ちに追撃してこれをせん滅せよ！」との命令。隊伍を無視して高師原まで駆け通し、ふらふらになって泊行事を終了した。



野外総合訓練 三ヶ日三代橋にて

6月10日 卒業

昭和20年6月10日、ついに卒業の日を迎える。入校当時、「歩兵操典（歩兵訓練のための事項を示した書）ひとつ覚えなくても、作戦要務令の1行が分からなくてもいい。いつ、どこででも死ねる人間になれば、本校を卒業する資格ができる。本校の訓練は死の訓練である。」と教えられた。以来、それを地でいく厳しい訓練が行われた。しかし、それを耐え抜くことができたと思うと、喜びもまたひとしおである。

卒業式後、寝室において一斉に階級章の取りかえと、左腕に将校勤務をあらわす山形をとりつける。みんな寝台に腰をおろして針を持っているのだが、今日ばかりは教官も叱らない。服装の整った者から各自の軍刀を身につけて、新米の見習士官ができあがる。みんな本当にうれしそうだ。声だけでなく、すべての動作がはずんでいる。

昼食は、被服倉庫前に食卓を持ち出して、中隊全員で最後の会食を行う。酒もぶどう酒もないが、ごちそうが食卓狭しと並べられた。入校以来、最初にして最

後のごちそうである。これを食べ終われば、今夕にはもう勤務地に出発する者もあるという。

午後、父母が面会に来てくれた。予期しないこと^{おどろ}で驚いたが、学校^{れんらく}から連絡があったという。

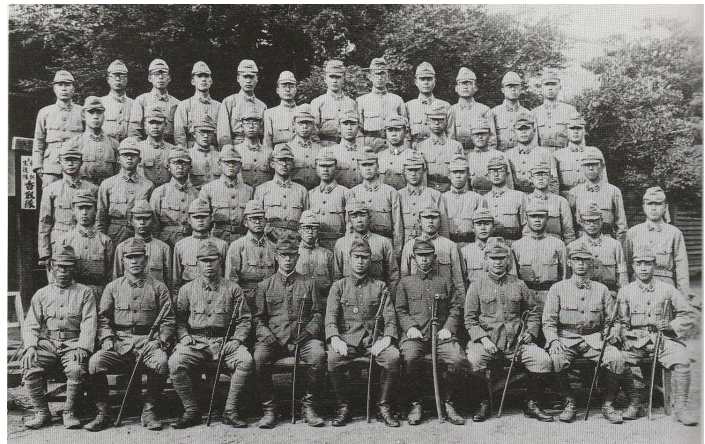
勤務地はまだ発表されたいないが、今度こそ父母の顔^{み おさ}も見納めだと思ふ。母が左手の包帯を見てどうしたのかと聞いたが、

「ちょっとケガをした。」とさりげなく答えておいた。やがて、

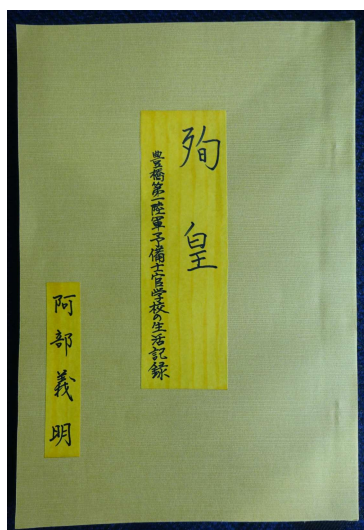
「第2区隊のご父兄の方は自習室へ入ってください」

との連絡で自習室へ行った。しばらくして帰って来た母は、眼を真っ赤に泣きはらしていた。さる5月30日深夜に区隊^{どの}全員が区隊長殿の軍刀をお借りして1枚の白布に血書^{けつめい}（自分の血で書くこと）して血盟（固くちかうこと）した“武士”^すというのを見せられたという。おのずから包帯の原因も分かっただろう。母には済^すまないことをしたように思ったが、“いや、これでいいんだ”と、自分で自分に釈明^{しゃくめい}した。

軍装品^{ぐんそう}の中から、冬の軍服1着を家へ持ち帰ってもらうことにした。ポケットの中には少尉^{しょう い}の襟章^{えりしょう}をしのばせて。“荷物が多くて行李^{こう り}（竹や柳^{やなぎ}などで編んだ箱形の入れ物）に入りきらない。冬までには家へ帰る機会もあろうからしまっておいてほしい”と言って……。遺品^{い ひん}のつもりで渡したが、父母は本心^{わた}を知らずか喜んで持ち帰ってくれた。もう、何も思い残すことはないようなさわやかな気持ちになった。



昭20.6月 卒業記念写真 前列2列目左から3人目が阿部氏



阿部氏が手書きで作成された八七頁に及ぶ手記「殉皇」

令和7年4月6日

(文責) 八名郷土史会 安形 茂樹